

「日本では、近年、若年層の“孤立化”が拡大しており、彼らがいざれ“孤立死”することが懸念されます」

「けらかんと言い放つ人物がいる。孤立死など高齢男性の問題だと思われがちだが、今や女性にとつても若者にとつても、決して他人事ではないと彼は言う。」

発言の主は、世界初の遺品整理専門会社を立ち上げ成功させた、キーパーズ代表取締役の吉田太一さん（51）。「遺品整理」という言葉からイメージされる、ジメット暗い人物かと思ひきや、人懐っこい笑顔の、ひょきんで毒舌の交じった、陽気な男性である。

吉田さんは、2002年の創業以来、累計2万件以上の遺品整理に携わってきた。

# 人ふドキュメンタリー

題字・永六輔

それを通じて“日本人の生きざまや死にざま”を肌で感じ取ってきたわけであり、それだけに彼の発言には説得力がある。

実際、現代の日本では、結婚適齢期の女性の6割、男性の8割が“恋人なし”といわれる現象が、年々進展している。“おひとりさま”として熟年期を迎える女性の数は増える一方だ。

離婚率の上昇とともに“熟年離婚”的増加が、それをい

つそう加速する。

吉田さんは言う。

「社会全体として人間関係の希薄化が進む中、そういう人々は社会から切り離され

“孤立化”していきます。

世間では、高齢者の孤立死

ばかりが注目される傾向にあります。しかし、65歳以上になると、行政の介護対象になりますし、孤立死防止に取り組む自治体が増えているため、“死後何か月も発見されない”ケースは実は少ないのです。

むしろ、50歳から65歳くらいの方々が、人知れず亡くなり長期間、発見されないケースが多いのです。

と吉田さんは言う。

「異臭がする」という通報で

孤立死の現場は凄惨だ。多くの場合、近所の人からの発見される。腐敗が進んだ遺体の内外には無数のうじ虫やゴキブリが這い回り、死臭の充満した室内にはハエがぶん

# 孤立死を防ぎたい！



ゴミ屋敷と化した室内、食器が散らかるキッチン……。孤立死の現場でしばしば目にする光景だそう

ゴミの中にもうずくまるように、腐敗した遺体が横たわる。そんな悲惨な孤立死の現場に乗り込んで遺品を整理し、遺族やご近所、大家への対応や遺品の供養などをを行う——。そんな世界初の遺品整理専門会社を軌道に乗せたのは、数々の修羅場を乗り越えた、超破天荒な男だった。

遺品整理屋が見た  
おひとりさま社会の裏側——

キーパーズ代表取締役

吉田太一さん<sup>51</sup>